

論 文

離職者を対象とした介護福祉士養成事業における社会人学生の経験
— 離職者訓練生と介護雇用プログラム生の比較 —

宮 上 多加子¹⁾

河 内 康 文²⁾

—抄 録—

本研究の目的は、介護を学ぶ社会人学生の資質や経験が、学ぶ過程にどのように影響しているのか、また、学習を経ることで介護や職務に関する認識がどのように変化するかについて明らかにすることである。調査方法は、離職者を対象とした介護人材養成事業を活用して介護福祉士養成校に入学した社会人学生13人に対して個別面接調査を実施した。

逐語録の質的分析の結果、19のカテゴリーと54のサブカテゴリーが生成され、相互の関係を検討して成人学生の類型化を行うと、8つのタイプに分類された。学生の介護を学ぶ経緯や学習に関する意識には多様性があったが、多くの学生は、会話力と生活支援の技術を保持していることを強みとして認識していた。

キーワード：介護人材養成 離職者 成人教育

I. 研究の背景

超高齢社会における介護ニーズの増大に伴って、介護人材の量的確保と質的な向上は喫緊の課題となっている。平成19年に見直しが行われた「社会福祉事業に従事する者の確保を図るための措置に関する基本的な指針」では、福祉・介護人材確保のために行うべき取り組みが5項目に整理されており、その中には他分野で活躍している人材・高齢者等の「多様な人材の参入・参画の促進」が含まれている。その後、平成21年度からは、失業者・離職者に焦点を当てた雇用・人材戦略として、緊急雇用創出事業における「離職者訓練制度」での介護人材養成（以下、訓練事業という）が創設された（厚生労働省 2009）。加えて、長期的な経済不況と雇用情勢の悪化という社会情勢の中で、介護・福祉分

野を、今後雇用が増加する成長分野としてとらえた重点分野雇用創造事業における「働きながら資格をとる」介護雇用プログラム（以下、プログラム事業という）が創設された（厚生労働省 2009）。つまり、両事業は、創設の経緯が異なるものの、高齢化の進行と不況という背景の中で、雇用創出と介護人材の確保および質向上を同時に解決する方策として生み出されたといえる。

訓練事業は、他産業の離職者を介護人材として養成することを目的に、新たにヘルパー1級（6か月訓練）と介護福祉士（2年訓練）を加えて、平成21年度補正予算の緊急雇用対策として開始された。介護福祉士養成コース（2年訓練課程）では、平成21・22年度の2年間で5,825人が受講している（日本介護福祉士養成施設協会 2011）。また、プログラム事業は、離職者等を介護保険サービス事業所等有期雇用契約労働者として雇い入れて介護補助業務に従事させるとともに、介護福祉士養成校等に在籍させて資格取得をめざす制度である。この事業を利用する離職者は、介護保険サービス事業所等の職

受付日：2011.11.4／受理日：2012.3.26

1) 高知県立大学社会福祉学部

2) 今治明德短期大学

員と同時に、介護福祉士養成校の学生となり、養成校での授業時間が事業所等での就業時間として取り扱われることから、「働きながら資格をとる」と表現されている。この事業を受講している成人学生は、平成22年度で991人である(日本介護福祉士養成施設協会 2011)。

両事業は、制度上に相違があり、各都道府県および養成校によって両事業の受講学生数にばらつきがあるものの、従来の高等学校卒業直後の学生が主流であった介護福祉士養成校に、多数の成人学生が入学するという状況が生じている。しかし、介護福祉士養成校においては、従来から高等学校卒業直後の若年層を想定した教育内容や教育方法を基に専門職養成を行っており、多様な背景と資質を持つ社会人への適用という点では実践や研究の蓄積がほとんどない(宮上 2010)。また、訓練事業やプログラム事業は、雇用促進と介護人材の確保を同時に解消する方策として制度面や数量的な面からの評価はなされているが(日本介護福祉士養成施設協会 2011)、社会人の持つ資質が介護福祉人材としてどのように活用できるのかという質的な面からの検討や分析は行われていない。

そこで、本研究では、離職者に対する介護人材養成事業(訓練事業およびプログラム事業)を利用して介護福祉士養成校に入学した社会人学生に対して個別面接調査を行い、社会人学生の特徴を分析したうえで、介護人材養成の課題と可能性について検討する。

II. 研究目的

訓練事業およびプログラム事業を利用して介護福祉士養成校に入学した社会人学生の学びのプロセスを捉えるとともに、学生の特徴を分析して資質や経験の持つ影響について明らかにする。また、介護福祉を学ぶことで介護や職務に関する認識がどのように変容するのかについて検討する。

III. 研究方法

本研究は、学習体験について社会人学生の立場から検討することを目的としていること、またこの研究テーマに関する先行研究が少なく、適切な理論や仮説が提示されていないことから、質的帰納的なアプローチを用いた。具体的な手順としては、介護福祉士養成校において、事業を活用して入学した社会人学生13人に対する個別面接調査を実施し、逐語録をもとに文脈のまとめり毎に要約カード289枚を作成した。その後、MAXqdaを活用して質的分析を行った。MAXqdaは、カード等の紙媒体を使用した分析方法に比べて、質的分析に不可欠であるデータの比較検討が容易にできるメリットがある。分析の結果、最終的に54のサブカテゴリーと19のカテゴリーをまとめた。また、対象者相互の比較検討については、Excelを用いて視覚的に捉えることができる事例-コードマトリックス(佐藤 2008)を活用し、複数のサブカテゴリー間の比較検討と各サブカテゴリーに含まれるデータ同士の比較検討を行い、類型化を行った。

質的調査方法におけるデータの厳密性を高め、分析結果をより確かなものとするために、以下の2つを行った。確実性を高めるための協力者への再確認(メンバーチェック)については、カテゴリーおよびサブカテゴリーを生成した時点で、調査対象者全員に対して結果を文書で報告し、自身の経験に照らして納得できるかどうかについて参考意見を聴取した。また、確証性を確保するために、介護福祉教育に携わっている教員を含めた自主研究会で結果について協議し、データの解釈や介護福祉教育の現状についてディスカッションを行い合意を得た。

IV. 倫理的配慮

調査対象者の選定手続きについては、事業を受託している介護福祉士養成校2校の教務担当教員を通して行った。あらかじめ年齢・性別・職業経験・成績および学習意欲等についての条

件を提示したうえで、偏りのないような調査候補者の推薦を依頼した。調査候補者に対して、研究者から研究内容と倫理的配慮についての説明を文書および口頭で行い、了解を得たうえで研究参加への同意書に署名してもらった。なお、調査開始前には、高知女子大学社会福祉研究個人情報保護・倫理審査委員会に申請して承認を得ている（第178号，平成22年6月28日付）。

V. 結果

1. 調査対象者の概要

調査対象者の概要は表1に示すとおりである。調査実施期間は、平成22年8月6日～9月29日であった。本調査における対象者の属性を日本介護福祉士養成施設協会が実施した全国調査の結果（日本介護福祉士養成施設協会 2011）と比較すると、年齢構成において本調査の対象者はやや偏りがあるものの、性別では全国調査とほぼ同様の傾向であった。また、学歴は、全国調査では高等学校卒が約半分、専門学校と大学

卒がそれぞれ2割程度であったが、本調査では、プログラム事業を利用している学生（以下、プログラム生という）の学歴が高く、訓練事業を利用している学生（以下、訓練生という）では、対象者全員が高等学校卒となっている。

2. サブカテゴリーおよびカテゴリー

6人の訓練生に対する調査による逐語録から生成されたサブカテゴリーは25個、同様に7人のプログラム生の逐語録から生成されたサブカテゴリーは29個であった。合計54個のサブカテゴリー間の関係、およびサブカテゴリーとデータとの関係についてMAXqdaを用いて検討しながら抽象化作業を進め、最終的に19個のカテゴリーを析出した（表2）。さらに、19のカテゴリーを用いて、養成校入学前から卒業に至る時間軸を念頭に置いて関係を検討し、社会人学生の学びの過程を5つの局面にまとめたものが表3である。以下の文中では、5つの局面を【 】,カテゴリーを「 」,サブカテゴリーを『 』として表記している。

表1 社会人学生インタビュー対象者

記号	性別	年齢	プログラム生/ 訓練生	学年	学歴/職歴
A	男性	45	プログラム生	1年	専門学校卒/コンピューターシステム開発
B	女性	40	プログラム生	1年	高等学校卒/金融機関勤務・専業主婦
C	女性	41	プログラム生	1年	高等学校卒/サービス業・事務職
D	男性	33	プログラム生	1年	大学卒/サービス業等
E	男性	32	プログラム生	1年	専門学校卒/サービス業
F	女性	41	プログラム生	1年	大学卒/専業主婦・派遣会社
G	男性	31	プログラム生	1年	大学卒/不動産業
H	男性	29	訓練生	2年	高等学校卒/建設会社勤務
I	男性	27	訓練生	2年	高等学校卒/製造業
J	女性	35	訓練生	2年	高等学校卒/事務職・販売員
K	女性	40	訓練生	2年	高等学校卒/事務職
L	女性	49	訓練生	2年	高等学校卒/事務職
M	女性	22	訓練生	2年	高等学校卒/受付・営業

表2 介護福祉士養成教育における社会人学生の学びに関するカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー	
	コード	
応募前の躊躇や葛藤	t 1	入学するまで介護について関心がなかった
	t 2	2年間継続可能かに不安
	p 1	入学前には介護に無縁
入学前の周囲の協力	t 3	介護に詳しい親族に相談
	t 4	入学前の家族の反応はあまりなし
	p 2	身近な人の理解と応援
タイミング良く事業を紹介される	t 5	タイミング良くハローワークで事業を紹介された
資格を取得する意味や価値を早期に意識	p 3	離職をきっかけに自分のキャリアプランを見通して介護に目を向ける
	p 4	地元での継続性のある仕事として介護を選択
	p 5	再就職のため「手に持つ武器」としての介護福祉士の資格
	p 6	自分のキャリアにとって最後のチャンスであり転機である
入学前の準備と試練	p 7	施設の就職面接で直面した自身の介護人材としての価値
	p 8	入学前の準備と体験
ユニークな存在が学校に馴染んでいく	t 6	最初は若いクラスメートとの関係づくりに戸惑う
	t 7	教員の対応は学生という建前と社会人としての扱いの両面がある
	t 8	訓練生という厚遇を意識
	p 9	多様な年齢層の学生がいる環境に慣れる
久しぶりの勉強で感じる苦痛	p 10	座学での勉強がしんどい
	t 9	書くことに苦手意識
二度目の学生生活を楽しむ	p 11	気持の揺れ、学業継続へのかすかな不安
	p 12	学生生活を楽しむ
社会人の持つ強みはコミュニケーション力と生活者としての技術	t 10	人と話すことに抵抗や緊張感がない
	t 11	生活者としての技術や状況判断力が強み
	p 13	社会経験が介護に活用できる
	p 14	社会人としての経験が生きてるのはコミュニケーションと状況判断力
現場でプログラム生として動けるまでの時間	p 15	職員としての介護実施にお互いがとまどう
	p 16	プログラム生としての勤務は介護技術の勉強になる
	p 17	介護施設での勤務に徐々に慣れる
プログラム生として現場に入って感じる疑問	p 18	利用者の尊厳が確保されない作業的ケアに疑問
	p 19	介護現場の人間関係が悪い
	p 20	若い人や女性の多い介護現場の雰囲気抵抗感
プログラム生が職員として現場に入る際の軋轢	p 21	プログラム生に対する現場や社会の目線はとまどいと妬み
	p 22	学生と就業者の関係は自分で割切って受け入れる
実習はきついが、仕事とは立場や視点が異なる	t 12	実習では社会人学生として理解されにくいためストレス
	p 23	実習は時間的な余裕があり勤務とは得るものが違う
自分の職業経験を通して介護現場をみる	t 13	職業としての介護を客観的にみて、現実的に妥協する
	t 14	職員のケアを分析し、客観的に評価する目を持つ
	p 24	介護現場の厳しさを予想した上で覚悟を決める
実習で関わり方と介護の基礎を学ぶ	t 15	利用者との関わり方を実践的に学ぶ
	t 16	介護を勉強することで介護の範囲が広く深く変化した
介護を学ぶことで価値観と人の捉え方が変化した	t 17	社会人はものの見方が無難で固定的
	t 18	勉強することで高齢者の立場から考えることができる
	p 25	利用者の身体面・精神面を理解してケアする考え方は新鮮であるが大変
	t 19	学校の授業は理想で、現場とのギャップがある
学校の授業内容と現場のケアの自分なりの調整	t 20	学校での学習と現場に必要な知識を自分ですり合わせる
	p 26	学校で学ぶ原則と現場の優先度との相違は自分で割切る
	p 27	学校で介護の基礎を学ぶ価値は根拠と全体的視野
介護することに意欲を持つ	t 21	利用者の変化にやりがいと楽しさを感じる
	t 22	理論や知識を現場でどう使うか考える
	t 23	前向きで意欲的な考えを持つ
自分に合った現場を志向	t 24	就職は給与よりも施設の方針や介護の内容で決める
	t 25	将来はケアマネの資格をとりたい
	p 28	卒業後は職場を選択して、まず介護職として就職
	p 29	介護の現場で次のキャリアを目指す

※コード先頭のtは訓練生、pはプログラム生のデータを示す。番号は、それぞれの通し番号である。

表3 成人学生の介護に関する学びの過程の比較

過程・変化	プログラム生のみに含まれる カテゴリ	共通するカテゴリ	訓練生のみに含まれる カテゴリ
養成校入学に至る過程	資格を取得する意味や価値を早期に意識 入学前の準備と試練	応募前の躊躇や葛藤 入学前の周囲の協力	タイミング良く事業を紹介される
学びの場に馴染む過程	二度目の学生生活を楽しむ	ユニークな存在が学校に馴染んでいく 久しぶりの勉強で感じる苦痛 社会人の持つ強みはコミュニケーション力と生活者としての技術*	
職場に馴染む過程	現場でプログラム生として動けるまでの時間 プログラム生として現場に入って感じる疑問 プログラム生が職員として現場に入る際の軋轢		
実践的な学びの場に馴染む過程		社会人の持つ強みはコミュニケーション力と生活者としての技術* 実習はきついが、仕事とは立場や視点が異なる 自分の職業経験を通して介護現場をみる	実習で関わり方と介護過程の基礎を学ぶ
学びによる内面的な変化		介護を学ぶことで価値観と人の捉え方が変化した 学校の授業内容と現場のケアの自分なりの調整 自分に合った現場を志向	介護することに意欲を持つ

* 2つの過程に共通して含まれるカテゴリ

3. 成人学生の学びの過程の全体像

訓練生およびプログラム生に共通する過程として、【養成校入学に至る過程】、【学びの場に馴染む過程】、介護現場での経験を経ることによる【実践的な学びの場に馴染む過程】、【学びによる内面的な変化】があった。また、プログラム生は、職員としての所属先である【職場に馴染む過程】を体験している点が訓練生とは異なっていた。

この過程に属するカテゴリには、両者に共通するカテゴリと、訓練生のみのカテゴリがある。自分の職業経験と介護現場でのケアを比較して、「実習はきついが、仕事とは立場や視点が異なる」「自分の職業経験を通して介護現場をみる」という行動をとっている。2年生である訓練生は、実習の段階が進んでいったため、「実習で関わり方と介護過程の基礎を学ぶ」といった介護実習の目標と関係する内容のカテゴリがあった。

【職場に馴染む過程】

プログラム生に独自の過程として、事業所での【職場に馴染む過程】があった。プログラム生は、養成校の学生であると同時に、介護保険サービス事業所の職員という立場を持っている。しかし、養成校入学当初は、介護福祉の知識や技術は乏しいため、「現場でプログラム生として動けるまでの時間」というカテゴリがあった。また、上述したように、プログラム事業においては、学生としての立場が優先され、養成校での授業時間や実習時間を事業所における勤務時間とみなしている。このようなプログラム生の待遇について、事業所の職員の理解が十分ではなかったりすることや、羨ましいあるいは妬ましいという感情を伴った言動を受けて、「プログラム生が職員として現場に入る際の軋轢」を感じていた。同時に、職業経験や生活経験で培ってきた価値観を通して介護現場を見た際には、「プログラム生として現場に入って感じる疑問」を意識している者もいた。

【学びによる内面的な変化】

養成校入学前に社会人学生が抱いていた介護のイメージは、いわゆる‘下の世話’という表現にあるような具体的な身体介護であったが、養成校での学習と実習経験を通して、介護の範囲の広がりや深さを実感している。このような変化は、「介護を学ぶことで価値観と人の捉え方が変化した」としてまとめられた。さらに、養成校で学ぶ介護の基礎と、介護現場における実践とは、多くの面で乖離があるが、このような現実を認識したうえで、自分なりの納得と対応をしようとする姿勢が「学校の授業内容と現場のケアの自分なりの調整」としてまとめられた。そして、「自分にあった現場を志向」するとともに、「介護することに意欲を持つ」とい

う前向きな姿勢が見られた。

4. 成人学生の特徴による類型化の試み

佐藤（2008）による事例-コードマトリックスは、各事例に含まれるデータとコード（本研究ではサブカテゴリー）同士の比較検討を行っていく方法である。これには4つの比較法があり、①複数のコード間の比較、②コード名とデータの比較、③データ同士の比較、④複数の事例間の比較となっている。本研究では、逐語録から生成した要約カードと、訓練生およびプログラム生それぞれに属するサブカテゴリー相互の関係を4種類の比較法を用いて検討した。結果、プログラム生と訓練生それぞれ4類型に分類された（表4、表5）。

表4 プログラム生の類型

コード	サブカテゴリー	対象者	リベンジ型			やりがい型		サービス業型		達観型	
			A	B	C	D	E	F	G		
p1	入学前には介護に無縁		*	*	*	*	*	*	*	*	*
p2	身近な人の理解と応援				*	*	*	*	*		
p3	離職をきっかけに自分のキャリアプランを見通して介護に目を向ける		○		○	○	○	○	○	○	○
p4	地元での継続性のある仕事として介護を選択		◎		○		○	○	○	○	○
p5	再就職のため「手に持つ武器」としての介護福祉士の資格			○						○	
p6	自分のキャリアにとって最後のチャンスであり転機である			○	○	○	○	○			
p7	施設の就職面接で直面した自身の介護人材としての価値		◎	○				○			
p8	入学前の準備と体験		◎		○	○	○	○	○	○	○
p9	多様な年齢層の学生がいる環境に慣れる			*		*	*	*	*	*	*
p10	座学での勉強がしんどい		*		*	*	*	*	*	*	*
p11	気持の揺れ、学業継続へのかすかな不安		*	*	*	*	*	*	*	*	*
p12	学生生活を楽しむ				○						○
p13	社会経験が介護に活用できる				○			○	○	○	○
p14	社会人としての経験が生きるのはコミュニケーションと状況判断力			○	○	○	○	○	○	○	○
p15	職員としての介護実施にお互いがとまどう					○	○				
p16	プログラム生としての勤務は介護技術の勉強になる		○	○	○		○	○	○	○	○
p17	介護施設での勤務に徐々に慣れる			○		○					○
p18	利用者の尊厳が確保されない作業的ケアに疑問			*	*	*	*	*	*	*	*
p19	介護現場の人間関係が悪い				○				○	○	
p20	若い人や女性の多い介護現場の雰囲気抵抗感					○					
p21	プログラム生に対する現場や社会の目線はとまどいと妬み				○			○	○	○	
p22	学生と事業者の関係は自分で割切って受け入れる			○		○					○
p23	実習は時間的な余裕があり勤務とは得るものが違う				○						○
p24	介護現場の厳しさを予想した上で覚悟を決める			○	○	○			○	○	
p25	利用者の身体面・精神面を理解してケアする考え方は新鮮であるが大変		○	○	○	○			○		
p26	学校で学ぶ原則と現場の優先度との相違は自分で割切る。		*		*	*	*	*	*	*	*
p27	学校で介護の基礎を学ぶ価値は根拠と全体的視野		○			○			○	○	
p28	卒業後は職場を選択して、まず介護職として就職			*	*	*	*	*	*	*	*
p29	介護の現場で次のキャリアを目指す		*	*	*	*	*	*	*	*	*

* データあり

○ カテゴリーと類型化に関係するデータあり

◎ カテゴリーと類型化に関係するデータ複数あり

表5 訓練生の類型化

コード	サブカテゴリー	対象者	参入型		意欲型		余裕なし型 L	若者型 M
			H	I	J	K		
t 1	入学するまで介護について関心がなかった		*	*	*		*	
t 2	2年間継続可能か不安		○		○	○		
t 3	介護に詳しい親族に相談		*		*	*	*	*
t 4	入学前の家族の反応はあまりなし		*	*	*		*	*
t 5	タイミング良くハローワークで事業を紹介された		*	*	*	*	*	*
t 6	最初は若いクラスメートとの関係づくりに戸惑う						○	
t 7	教員の対応は学生という建前と社会人としての扱いの両面がある		*	*	*	*	*	
t 8	訓練生という厚遇を意識		*		*		*	*
t 9	書くことに苦手意識		○					
t 10	人と話すことに抵抗や緊張感がない			○	○			○
t 11	生活者としての技術や状況判断力が強み				○	○	○	○
t 12	実習では社会人学生として理解されにくいためストレス						○	
t 13	職業としての介護を客観的にみて、現実的に妥協する		○	○			○	○
t 14	職員のケアを分析し、客観的に評価する目を持つ		*	*	*	*	*	*
t 15	利用者との関わり方を実践的に学ぶ		○	○	○	○		○
t 16	介護を勉強することで介護の範囲が広く深く変化した		*	*	*	*	*	*
t 17	社会人はものの見方が無難で固定的			○				
t 18	勉強することで高齢者の立場から考えることができる		○	○	○	○		○
t 19	学校の授業は理想で、現場とのギャップがある		○	○			○	
t 20	学校での学習と現場で必要な知識を自分ですり合わせる		*	*	*	*	*	*
t 21	利用者の変化にやりがいと楽しさを感じる				○	○		
t 22	理論や知識を現場でどう使うか考える				○	○		
t 23	前向きで意欲的な考えを持つ		○	○	○	○		○
t 24	就職は給与よりも施設の方針や介護の内容で決める		*	*	*	*	*	*
t 25	将来はケアマネの資格をとりたい			○		○		

*データあり

○カテゴリーと類型化に関係するデータあり

◎カテゴリーと類型化に関係するデータ複数あり

5. プログラム生の4類型

①リベンジ型 (45歳男性)

異業種でのキャリアを積んでいるが、思いがけないリストラを契機に、定年まで継続でき、かつ自身の力が生かせる職種として介護を選んで応募している。つまり、「地元での継続性のある仕事として介護を選択」しており、「入学前の準備と体験」も豊富である。一方で、養成校入学前には介護保険サービス事業所の採用試験に不合格になるという経験も経ている。自己肯定感や仕事に対する責任感が強く、自分を切った元の業種の人間に対して、別の分野で雪辱を果たすという思いと、「もう一度チャレンジできる」という期待を抱いている点に特徴がある。

②やりがい型 (40歳女性/41歳女性)

専業主婦の経験があり、子どもが成長して家

庭内での役割が軽減されたのを契機に、定年まで取り組めてやりがいのある職業として介護を選んでいる。ヘルパー資格も取得しており、介護分野で勤務するためには、介護福祉士資格が必須であるとの思いが強い点が特徴的である。

このような認識は、「自分のキャリアにとって最後のチャンスであり転機である」というサブカテゴリーに表れており、自身の資質についても「社会人としての経験が生きるのはコミュニケーションと状況判断力」と考えている。介護関係の授業内容については、「利用者の身体面・精神面を理解してケアする考え方は新鮮であるが大変」と捉えている。また、介護事業所における仕事についても「プログラム生としての勤務は介護技術の勉強になる」と前向きに考えている。

③サービス業型（33歳男性／32歳男性）

介護とは無関係のサービス業に従事していたが、地元での転職やUターンを検討した際に、事業を紹介されて応募した。介護分野は、人と接する仕事という共通項と、社会的ニーズを背景とした安定性で決めている。資格志向が強く、介護福祉士資格は通過点という意味合いがある。

やりがい型と同様に、「自分のキャリアにとって最後のチャンスであり転機である」「社会人としての経験が生きてるのはコミュニケーションと状況判断力」という認識はあるが、事業所での勤務についてはとまどいが生じている。

④達観型（41歳女性／31歳男性）

大学卒で、過去に社会福祉と近接領域の資格取得を検討した経験がある。介護現場で遭遇する課題や矛盾に対して、少し距離を置いて観ているような印象があり、同時に自身が置かれている状況についても第三者的な見方をしている。

学びに関する積極的な認識がある一方で、「介護現場の人間関係が悪い」「プログラム生に対する現場や社会の目線はとまどいと妬み」というサブカテゴリーにあるような負の側面も口にしている。しかし、「社会経験が介護に活用できる」「学校で介護の基礎を学ぶ価値は根拠と全体的視野」というように、自身の立場と学習経験とを客観的に捉えている点が特徴的である。

6. 訓練生の4類型

①参入型（29歳男性／27歳男性）

20代後半の男性で、建設業や製造業の分野での職歴があり、最初は福祉分野での就職を希望したわけではないが、「継続できる現実的な職業」という判断で異業種である介護に新たに参入した。福祉以外の職種での経験をもとに、客観的な視点を持って介護現場を見ている。

これらの視点は、「学校の授業は理想で、現場とのギャップがある」「職業としての介護を客観的にみて、現実的に妥協する」というサブカテゴリーに示されている。また、②の意欲型と同様に、「利用者との関わり方を実践的に学ぶ」「勉強することで高齢者の立場から考えること

ができる」というような介護に対する積極的な学習姿勢を持っている。

②意欲型（35歳女性/40歳女性）

30代後半の女性で、事務職の経験があるが、リストラ等を経験し、資格を持った専門職として働きたいという希望と、介護という仕事内容の両方に納得して入学してきた。従って、学習意欲が高く、いろいろな体験を自分のものとして生かしていこうとする意識が高い。

①の参入型と同様に、介護の学習について意欲的であり、「理論や知識を現場でどう使うか考える」「利用者の変化にやりがいと楽しさを感じる」というサブカテゴリーが特徴的である。このように前向きな姿勢がある一方では、自身の持つ気力や体力の限界、また学習が継続できる状況が続くか否かという不安から、「2年間継続可能かに不安」という声があった。

③余裕なし型（49歳女性）

年齢的に、自分の子ども世代の学生と一緒に学ぶという状態となっている。社会人経験があることから、リーダー的な役割を任せられることもあるが、自分の中ではそれをこなす余裕がない状態である。また、余裕のなさから、実習や現場で学ぶという意識まで到達しておらず、学習が受け身となっている。

このように養成校内や介護現場での不安や緊張を示すサブカテゴリーとして「最初は若いクラスメートとの関係づくりに戸惑う」「実習では社会人学生として理解されにくいためストレス」がある。しかし、自身の持つ資質については、他の女性の訓練生と同様に「生活者としての技術や状況判断力が強み」と感じている。

④若者型（22歳女性）

職業経験はあるものの短期間であり、年齢的には若年層の学生との差が少ない。一旦社会人を経験したことで、仕事に対する意識はしっかりと持っているが、養成校教員や現場からは一般学生と同じように扱われることが多いと思われる。

職業経験は短いものの、一般学生との相違については「人と話すことに抵抗や緊張感がない」「生活者としての技術や状況判断力が強み」と考えており、学習や仕事についても「前向きで意欲的な考えを持つ」という特徴がある。

VI. 考察

1. 社会人学生の多様性に対応した学びの支援

訓練生とプログラム生は、制度上の違いや調査を実施した学年の違いにより、学びの過程に含まれるサブカテゴリーやカテゴリーには相違があった。しかし、表3に示したように両者には共通するカテゴリーも多くみられた。両者に共通する社会人学生の特徴としては、多様性および社会経験や職業経験の持つ価値や意義についての認識があると考えられる。

表4、表5で訓練生とプログラム生がそれぞれ4類型に分類されたように、社会人学生は年齢や職業経験、また介護福祉士の資格取得を目指した経緯について多様性があった。さらに、この多様性は、介護を学ぶことに関する意識、つまり介護福祉士という資格を取得する意義についても、資格を得て行う介護そのものに価値を見出しているのか、社会福祉分野で仕事をしていく中での足掛かりとなる資格としてとらえているのかという点で相違がみられた。これは、何を深く学びたいかという学習ニーズの相違にも関係すると考えられる。

しかし、従来の介護福祉士養成校における教育は、高等学校卒業直後の若年層の学生に対する体系として組み立てられており、成人学生の多様性に対応できる柔軟性は少ない。アメリカの成人教育学者ノールズ (Knowles, M.) は、学校教育を中心とした子どもの教育 (ペダゴジー) に対して、成人の特徴に基づく独自の教育学 (アンドラゴジー) を提唱している (Knowles 1980)。その特徴は、成人学習者の自己決定性 (self-directedness) と経験の学習資源としての価値に着目している点である。離職者を対象とした介護人材養成教育においても、本来は成人教育学の基本理念が尊重されるべきであると

考えるが、介護・福祉人材養成という目的を持った官主導の事業であることや、介護福祉士養成教育という一定のカリキュラムに沿った制度であることから、成人学生の個々の学習ニーズに対応した学習内容を設定することが難しく、当面は教育方法における工夫で対応していくしかないと思われる。

一方、介護福祉士養成施設協会が行った全国調査 (日本介護福祉士養成施設協会 2011) では、養成施設における教育の内容等について、『満足』している者が四分の三以上を占めている。しかし、本研究の結果からは、介護現場におけるケアに対して多くの成人学生が課題意識を持っており、それは、『利用者の尊厳が確保されない作業的ケアに疑問』『介護現場の人間関係が悪い』というサブカテゴリーにも表れている。これらの課題に対して、成人学生は「学校の授業内容と現場のケアの自分なりの調整」として、いわば社会人としての分別で納得しようとしているが、根本的な改善策としては、現場における介護の質向上を推進することが必要である。

2. 社会人学生の持つ経験や資質の活用

社会人学生は、社会経験や職業経験を通して得た会話力や状況判断力について、「社会人の持つ強みはコミュニケーション力と生活者としての技術」として、いわば経験者の強みとしてとらえ、養成施設内の学習や介護現場での学びにおいて活用しようとしていた。ノールズの提唱している成人教育学においても、成人学習者の持つ経験の学習資源としての価値に着目している。つまり、【学びの場に馴染む過程】、【職場に馴染む過程】、【実践的な学びの場に馴染む過程】のいずれにおいてもスムーズにその場に馴染み、学んでいく際に必要となる資質であると考えられる。

また、学びによる内面的な変化について、「介護を学ぶことで価値観と人の捉え方が変化した」と両事業の学生ともに認識していた。介護福祉士養成施設協会が行った全国調査においても、受講前後の比較では、介護を「誰にでもできる仕事である」と答えた割合が減少し、「専門的

な仕事である」「コミュニケーション能力を必要とする仕事である」とする割合が大きく増加している（日本介護福祉士養成施設協会 2011）ことから、専門的な介護の学習をすることで、介護をより深く理解しているといえる。

一方で、成人教育学においては、おとなの学習者は自らの慣習的思考や認識枠組みを転換することに抵抗を示すとされている（三輪 2009）。本調査における結果では、訓練生のデータの中で「社会人はものの見方が無難で固定的」というサブカテゴリーがあるものの、社会経験や職業があるがゆえに、新しい内容を学ぶ上で支障となる要因は析出されていない。この点においては、プログラム生がすべて1年生であったことや、各学生に対する調査が1回のみだったことから、社会人学生の認識の変容を分析するにはデータが不十分であったとも考えられ、今後の継続的な研究が必要である。

VII. 残された課題

本研究は、2つの県における訓練生とプログラム生の調査であり、地域が限定的であったことや、それぞれの学生に対する1回の調査であったことから、いくつかの課題が残されている。まず一つには、入学から卒業までの期間を通じた学びのプロセスとしては捉えきれていない点あげられる。これと関係して、カテゴリー相互の関係については不明確であり、成人学生の学びを促進あるいは阻害する要因についても解明しきれていない。加えて、プログラム生は、養成機関で体系的な学習をしていく一方で、介護保険事業所では介護職員としての仕事を行いながら現場での学びを経験しているという二重構造になっている。これらの2種類の学びの経験が、介護に関する認識の変容にどのように影響しているのかについても、今回の調査結果からは明らかになっていない。さらに、調査対象者の選定について、学習意欲が高く成績優秀な学生のみに偏ることがないように、養成校に対して候補者選定を依頼したが、結果的には、成人学生の集団の特徴を反映した調査対象者には

なっていない可能性がある。

これらの課題について検討するために、さらに調査対象を広げた継続的な調査と、成人学習者の特徴を加味した教育という視点からの分析および議論や検討が必要であると考えられる。

文 献

- グレップ美鈴 (2007) 「質的記述的研究」グレップ美鈴, 麻原きよみ, 横山美江編著 『よくわかる質的研究の進め方・まとめ方 看護研究のエキスパートをめざして』 医歯薬出版株式会社, 54-72.
- Knowles, Malcolm (1980) *The Modern practice of Adult Education : From Pedagogy to Andragogy*, Cambridge. (= 2002, 堀薫夫・三輪建二監訳 『成人教育の現代実践 ペダゴジーからアンドラゴジーへ』 鳳書房.)
- 厚生労働省 (2007) 「『社会福祉事業に従事する者の確保を図るための措置に関する基本的な指針』の見直しについて」
www.mhlw.go.jp/bunya/seikatsuhogo/dl/fukusijinzei.pdfを参照
- 厚生労働省 (2009) 「介護分野の人材確保・育成支援事業の概要」
www.mhlw.go.jp/shingi/2009/12/dl/s1211-13c.pdfを参照
- 三輪健二 (2009) 『おとなの学びを育む 生涯学習と学びあうコミュニティの創造』 鳳書房.
- 宮上多加子 (2010) 「高齢者福祉施設に勤務する介護福祉士のキャリア意識-職務意識に関する面接調査の質的分析から-」 『高知女子大学紀要社会福祉学部編』 No.59, 1-11.
- 日本介護福祉士養成施設協会 (2011) 『介護福祉士資格取得のための離職者訓練制度及び介護雇用プログラムに関する調査報告書～介護福祉士養成教育の新しい試み～』
- 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法 原理・方法・実践』 新曜社.

The Experience of Adult Students in Care Workers Training College
—Comparison between Two Different Systems for Unemployed Persons—

Takako MIYAUE
Yasufumi KOUCHI

Abstract

In this research, 13 adult students in care workers training college, who attended carework training program for unemployed persons, were interviewed individually. Then the data was examined how their qualifications and experiences have affected. The process of learning care and how the awareness about care and a caring profession have been changed through learning.

As a result of the analysis, 19 categories and 54 sub categories were produced, and in the end those students were classified into 8 types. Their circumstances of learning care and perception about learning varied, but many students recognized their communication and life support skills would be advantages.

Key Word : Training for care worker, Unemployed Person, Adult education